



聖後成



五葉蓮



全之蓮



心の自由を
まもる言葉

美しい日本語 荷風

永井荷風

持田叙子・高柳克弘〔編著〕

美しい日本語 荷風 Ⅲ 心の自由をまもる言葉 目次

第一部 荷風 散文・詩より

持田叙子 5

人の命のあるかぎり

6

自由と平和の歌

『紅茶の後』序

10

妾 宅

13

歌舞伎座の稽古

20

批評家の任務

25

文明一周年の辞

27

猥褻独問答

31

洋服論

34

亜米利加の思ひ出

40

勲章

43

『断腸亭日乗』と戦争

昭和十二年

56

昭和十三年

60

第二部

荷風

俳句より

高柳克弘

195

*

昭和十四年
昭和十五年
昭和十六年
昭和十七年
昭和十八年
昭和十九年
昭和二十年

161 145 124 109 91 78 65

第一部

荷風
散文・詩より

持田叙子

人の命のあるかぎり

人の命のあるかぎり自由は減びざるなり、と荷風は書いた。六十一歳、昭和十六年元旦の日記である。第二次世界大戦が前々年におきた。戦争色が生活を圧迫する。自由と平和は踏みつぶされる。そうなるほど荷風はつよくなる。今まで自身は病弱ですぐ死ぬかも、いや必ず早く死ぬ、と言っていた。日記でも作品でもそれが口癖だった。じぶんが弱いから、社会に迫害される弱い人間の味方なのだと言言していた。逆である。戦争という有事にそれが露呈した。

荷風はつよい。外からの強制や圧迫に決して負けない。いかなることにも折れない芯をもつ。つよいから、弱いはかないものを愛した。世の中に水層みくずのように浮かんで消える哀れのもろもろを、つよい筆の翼で庇護した。それが荷風文学の本質である。

美しいものについて語ろう、という声は荷風の全作品をつらぬいて聞こえる。彼の愛する美は私たちにわかりやすい。すなおで明るい。花と木と小鳥を愛した。平和なおやつ時間を愛した。人間の戦う世界と関わりなく、空にかがやく月や宵の明星を熱愛した。

俗だ、という人もいる。荷風の哀愁は甘くていただけないとする文学者芸術家も少なくない。荷風が死んだ六日後、女流作家の野上弥生子が交流あつてい哲学者の田辺元はじめに手紙で、「永井さんの死をどう御考えになりましたでしょうか」と問いかけている。彼らは荷風と同じ七十年代である。その独居死は他人事ではなかったのだろう。二人とも荷風は「日本人には珍しい強い人間」であるとすると、その文学を平俗だといささか見下す点でも共通する（『田辺元・野上弥生子往復書簡 下』岩波現代文庫）。

戦後日本の代表的な文化人である二人のこうした傾向がいい悪いではなく、改めて荷風の特質がよく解る。荷風は彼らのような知識人コミュニティを脱して書いていた。日本に珍しい独立空間で書いた。ちよくせつ読者に向けて書いた。ふつうの本好きの人にわかりやすく面白く書いた。自由なことばで書いた。

一見当たり前前のようだが奇跡的なことである。いかなるコミュニティにも属さないことは至難である。精神の自由を説く人は多いが、意識せぬうちに自身も何らかの文化の輪の中にいる。荷風はねばり強い決意で輪を脱しつづけた。一切のそんたくをしなかった。ひたすら読む人と対話して書いた。だから永遠に美しい。不滅の人気をもつ。真に自由な人から生まれた自由なことを、この機会にぜひ味わっていただきたい。

自由と平和の歌

『紅茶の後』序

『紅茶の後』とは、荷風が自身のひきいる「三田文学」に精力的に発表した文芸批評や季節エッセイ、劇評などをあつめた隨筆集である。盟友の靱山仁三郎の書店より同題のもと、明治四十四年、一九一一年に刊行された。序文はその際に初めて付けられた。抄出をかかげる。

「紅茶の後」とは静かな日の昼過ぎ、紙よりも薄い支那焼の器に味わう暖国の茶の一杯に、いささかのコニヤック酒をまぜ、或いはまた檸檬の実の一そぎを浮べさせて、ことさらに刺激の薫りを強くし、まどろみ勝ちなる心呼び覚まして、とりとめも無き事を書くという意味である。篇中過去の追憶に関すること多きもこれがためである。しかして時にまた、時事に激して議論めいた事を書いたにしても、それは初めから無法無責任の空論たることを承知して貰わねばならぬ。自分は己れの所論に対して己れ自ら何らの權威をも信用をも与えておらぬ。けれどもただその云い草が、果して魚河岸の阿兄の如くに気がきいているか否かについてのみ、大いに心配しているのである。

夏の朝風に刺青を吹かせ、日本橋の真中で喧嘩するの快感は、決して相手を無二無三に傷け害する事のみを必要としない。相手のものが心から恐れ入ったか否かを知る事よりも、まず第

一に、自分の心がすつきりと好い心持になり、次で急用を忘れて立ち留る見物人の方様へも、いささか面白い思いをさせることが必要なのである。喧嘩の相手と原因のいづれが正しきか否かを問う如きは蓋し最後の最後である。

三十二歳の手による、さわだつてお洒落な異色の序文である。

いかめしくない。肩の力が抜けている。まずふわんと、おやつ時のレモンティーが優しく香る。その香気のように、読む人のところを楽しく暖める文章を書いたのだと述べる。

ときに激して現代の時事問題にかみつく議論も書いたかもしれないが、決してそれを本気に取つてくださるな、自分の主張を正しいと権威づけることこそ最も自身の心から遠い、と強調する。

荷風はここで素晴らしいケンカのやり方を伝授してくれる。ケンカの秘訣は相手に退路を残し、粉砕するまで追いつめないこと。そんなことをすれば怨みがつり、どす黒い戦いが新たに始まる。ケンカの目標は——まず悔しいと思う自身の気もちを少しさっぱりさせること。そしてケンカを見物する皆さまにも、ああ面白かった胸がすいた、と思つていただけるショーであること。

全力で戦い血を流すなどは野暮のさわみである。ここはぜひ、朝一番に軽くケンカを片づけて喝采を浴びる、いなせなケンカのプロ、「魚河岸の阿兄」に学ぶべし。

「夏の朝風に刺青を吹かせ」というフレーズが美しい。朝顔のいさぎよい藍色が匂い、風鈴の音色も川面に響く。冒頭のヨーロッパな紅茶の香りと好一对になる、江戸前の言葉の華だ。

「喧嘩」にたとえながら荷風がここで説くのは、評論や批評の明るく華やかなスタイルについてで

あろう。議論の醍醐味は、意見交換立論反論の過程にある。相手を倒すことではない。

とうじ狭い文壇における文士どうしの言葉の戦いは激越であつたらしい。相手の作家生命をうばう殺気も濃厚だつた。荷風はそうした殺風景にうんざりしていたらしい。ほらほら、そんなに夢中になつて互いののしり合っている間に、かんじんのお客様、すなわち読者を放つたらかして、いるんじゃないかい。

この主張どおり以降、荷風の批評は断然ゆたかな芸尽くしである。つねに読者を置き去りにせず、読む人にしきりに呼びかける。話題は天候季節、絵画音楽、風俗行事と多彩にうねり変化する。とき世に放つ毒舌も必ず笑いをともなう。

三田文学主幹として、発禁や検閲の嵐の渦中に立つ若き荷風の説くケンカの秘訣は、私たちの日常にもとても役立つ。たしかに相手を追いつめても残るのは恨みと怒りだけ。生産性がない。むしろ相手に適当な逃げ道をつくって上げて、ときとうな頃合いを見てケンカをやめる。怒りを断ち切る。これは徹底して生涯、非戦をつらぬいた荷風から学ぶ貴重な知恵である。

妾宅しやうたく

明治四十五年、一九一二年二月、北原白秋ひきいる文芸誌「朱戀さんぼあ」に前半の五章までが発表され、おなじ年五月の「三田文学」に後半が発表された。題名が色っぽいので、小説と混同されないよう、表題に「随筆」と付記される。

この年の九月、父の命で結婚する荷風は三十三歳。欧米から帰ってよけいに、故国の封建制とうわべばかりの近代化に失望し、絶望する日々である。

本作の冒頭で、もはや一切全てをあきらめ、「仮面」をかむって世過ぎをすることに決めた「珍々先生」なる文筆家を登場させる。もちろん偽名である。「先生」は荷風の分身である。

浅はかな「西洋模倣」をする芸術家たちに立ち混じり、いちおう時代の「生存競争」についてゆく。しかし真にほつとして仮面をぬぐ「隠れ家」が必要だ。そこで先生はお気に入りの芸者を花街から引かせ、下町の川べりの四間しかない古い借家を妾宅として、彼女とともに住まう。ここは唯一の「心の安息所」である。

古い。寒い。暗くて気味わるい。建付けが貧相で、吹きこむ川風にふるえる。当代の文化人ならば逃げ出すであろう古家をあえて根城とし、猫をひぎに置きごたつに背を丸める老人くさい視点から、さあ、若い荷風のさっそうたる現代批判が次々に飛び出す。このギャップがいい。フランス帰

りの荷風の中から意表をついて、勝気な意地悪おじいさんが生まれた……！

皮相な文明文化への毒舌が爆裂するラストスパート、最後の八、九章より二か所を抄出する。

希臘、羅馬以降泰西の文学はいかほど熾であつたにしても、未だ一人として我が俳人一茶、大江丸の如くに、放屁や小便や野糞までも詩化するほどの大胆を敢てするものは無かつたようである。日常の会話にも下がかつた事を軽い可笑味として取扱い得るのは日本文明固有の特徴と云わなければならぬ。この特徴を形造つた大天才は、やはり凡ての日本的固有の文明を創造した籠居の「江戸人」である事は今更ここに論ずるまでもない。もし以上の如き珍々先生の所論に対して不同意な人があるならば、請う試みに、旧習に従つた極めて平凡なる日本人の住家について、まずその便所なるものが椽側と座敷の障子と庭なぞと相俟つて、いかなる審美的価値を有しているかを観察せよ。本家から別れたその小さな低い柿葺の屋根と云い、竹格子の窓と云い、入口の杉戸と云い、特に手を洗う椽先の水鉢、柄杓、その傍には極つて葉蘭や石路などを下草にして、南天や紅梅の如き庭木が眼隠しの柴垣を後にして立っている有様。春の朝には鶯がこの手水鉢の水を飲み、椽杓の柄にとまる。夏の夕には椽の下から大きな蕁が湿つた青苔の上にその腹を引摺りながら歩き出る。家の主人が石菖や金魚の水鉢を椽側に置いて菜しむのも大抵はこの手水鉢の近くである。宿の妻が虫籠や風鈴を吊すのもやはり便所の戸口近くである。草双紙の表紙や見返しは意匠なぞには便所の戸と掛けた手拭と手水鉢とが、いかに多く使用されているか分らない。かくの如く都会に於ける家庭の幽雅なる方面、町中の住居の詩

的情趣を、もっぱら便所とその周囲の情景に仰いだのは実際日本ばかりであろう。西洋の家庭には何処に便所があるか決して分らぬようにしてある。習慣と道徳とを無視するいかに狂激なる仏蘭西ふらんすの画家といえども、まだ便所の詩趣を主題にしたものはないようである。そこへ行くのと、江戸の浮世絵師は便所と女とを配合して、巧みなる冒険に成功しているではないか。細帯しどけなき寝衣姿ねまきの女が、懐紙を口に啣くわえて、例の艶なまめかしい立膝ながらに手水鉢の柄杓から水を汲んで手先を洗っていると、その傍に置いた寢屋の雪洞ぼんぼりの光は、この流派の常として極端に陰影の度を誇張した区劃の中に夜の小雨のいと蕭条しやうやうかに海棠かいとうの花弁を散らす小庭の風情を見せているなどは、誰でも知っている、誰でも喜ぶ、誰でも誘いざなわれずにはおられぬ微妙な無声の詩ではないか。

日本列島は狭い小国である。いかほど欧米を手本にしたとて、豊満な大平地と活発な生産力からうまれる彼らの「大きな芸術」にはかなわない。

国土に似あう、ささやかな愛らしい芸術が日本にはあるではないか。それは今むしろ世界においても現代的である。暮らしの随所に詩情を見いだし、日常生活を楽しむ小さな芸術——江戸の浮世絵や俳句はモダンだ。

たとえば偉大なギリシャ・ローマ文学とて発見していないテーマが日本にはある。それは人類の永遠の普遍、すなわち糞尿だ。大胆にも江戸の俳人狂歌作者は世界文学の先頭を切り、人類の排泄を詩として歌った。いくら威張っても澄ましても、みな人間。おならやおしっこ、うんこは誰でも

する。そのもの哀しさをユーモラスに詠む。すばらしい人間詩である。

もしやこの説に不服のある人は、どこにでもある平凡な木造の日本家屋を思い出してみよ。その縁側、障子と庭のよさ、それらとハーモニーをかなでる「便所」の美しさを改めて省みてほしい。

西洋では排泄の場所を徹底的に隠す。日本の家は隠すといった発想がない。便所を母屋から離れた庭の一角の趣ある小家とする。うすい木材をきれいに並べて屋根とし、柴の垣根でかこう。母屋とつながる廊下には手を洗う鉢を置き、水を受けとめる涼しげな植物を生やす。春はうぐいすが鉢の水を飲み、夏は用を足す人の目を喜ばせるために、戸口に風鈴や虫かごが吊るされる。

日本人の暮らしの知恵は、排泄の場を忌むべき汚らわしいものではなく、ほっと一息つく小さな別天地とした。浮世絵にはよく、この秘かな愛らしい場所が描かれる。トイレットを画材としたのは前人未到、江戸人のみであろう。まさに生活と芸術の理想の合致である。

日本の御老人連は英吉利^{イギリス}の事とさえ云えば何でもすぐに安心して喜ぶから丁度よい。健全なるジョン・ラスキンが理想の流れを汲んだ近世装飾美術の改革者ウイリアム・モリスという英吉利人は、現代の装飾および工芸美術の墮落に対して常に、趣味 *Gout* と贅沢 *Luxe* とを混同し、また美 *Beaute* と富貴 *Richesse* とを同一視せざらん事を説き、趣味をもつて贅沢に代えよと叫んでる。モリスはその主義として芸術の専門的偏狭を憎み飽くまでその一般的鑑賞と実用とを欲したために、時には却^{かえ}って極端過激なる議論をしているが、しかしその言うところは、あえて英国のみならず、殊^{とと}にわが日本の社会なぞに対してはこの上もない教訓として聴かれべ

きものが少くない。その一例を上ぐれば、現代一般の芸術に興味なき点は金持も貧乏人もつまりは同じであるという事から、モオリスは世のいわゆる高尚優美なる紳士にして伊太利亜、埃及などを旅行して古代の文明に対する造詣深く、古美術の話とさえいえば人に劣らぬ熱心家でありながら、平然として何の気にするところもなく、請負普請のような醜劣俗悪な居室の中に住まっている人があると慨嘆している。これは知識ある階級の人すらが家具及び家内装飾等の日常芸術に対して、一向に無頓着である事を痛罵したものであろうが、わが日本の社会に於てもまた同様。書画骨董と称する古美術品の優秀清雅と、それを愛好するとか称する現代紳士富豪の思想及生活を比較すれば、誰れか啞然たらざるを得んや。しかしてここに更に更に一層啞然たらざるを得ざるは新しき芸術、新しき文学を唱うる若き近世人の立居振舞であらう。彼らは口に伊太利亜復興期の美術を論じ、仏国近世の叙情詩を云々して、芸術即ち生活、生活即ち美とまで云い做しながらその言行の一致せざる事寧ろ憐むべきものがある。看よ。彼らは己れの容貌と体格とに調和すべき日常の衣服の品質縞柄さえ、満足には撰択し得ないではないか。

こう言ってもまだ、糞尿の話など鼻につく、お行儀が悪い、と顔をしかめる老大家は多かるう。それなら維新以来、イギリス文明びいきの彼らにも喜んでいただけよう、旬の英国芸術家、ウイリアム・モリスの生活芸術の思想に照らし合わせて説くことにする。

この美術家にして職人、詩人にして社会主義者である全能の芸術家は、貧富の差なく日々の生活を美しくして楽しむことは、人間のいのちの権利であると考えた。芸術とは王侯貴族のみのもので

はない。ふつうの家庭にも美と芸術があふれることが、社会をよくする。

芸術は王宮や寺院の中で化石化するものではない。今の時代のざわめきの中で多くの人に愛されるもの——これが自ら工房をつくり、椅子や食器や家具にいたるまで手しごとの芸術的なモノづくりを実践したモリスの信念だ。

この生活芸術の考えは、イギリスのみならず現今の日本でこそ注目すべきであろう。

芸術家顔する作家や画家。あるいはモリスも指弾する上流階級の紳士。彼らは美術といえ、古代の話や骨董談しからない。自分たちの日々の暮らしに生きて役立つ美術に思い及ばない。エジプト文明に明るい知識人が、かんじんの自身の家は一律平凡な建売住宅に住んで平気だ。

日本の場合もつとひどい。ルネッサンス期の古典を称揚し、フランス詩を愛吟する若い作家たちなど、自分に似あう衣服の布質や柄さえ選ぶセンスがない。美を愛する意識がまったく身につけていない。その言行不一致に啞然とするのみである。

——啞然。荷風がひときわ憤激する折につかう漢語である。「妾宅」は一見いかにも凡々たる花柳小説の皮をかむる。下町の小家でお妾と先生が仲よく心尽くしの手料理をかこむ時間が軸となる。しかし皮をむいてみると、中身の果実からは若々しい最新の生活芸術論の汁が飛び散る。

美術と工芸の境を取り払い、両者を生活にかかわる芸術として活性化することをめざした革命家、モリスの日本への紹介はとびきり新しい。「妾宅」とほぼ同時に、イギリス留学経験をいかして工芸家の富本憲吉がモリス制作の家具・壁紙・織物・ステンドグラスなどを美術雑誌に紹介した。富本憲吉と荷風。この二人がモリスのアーツアンドクラフツ運動のもっとも早い紹介者である。日本

近代文化史に刻印される快挙である。

もともと荷風はモリスに照合させて、日本家屋のトイレットをしきりに生活芸術の一つの理想と説く点にたいそうワサビが利いている。

小さなころから夜中に恐怖でふるえながら暗くながい廊下をあるき、トイレットに通った荷風にとつて、そこは家の中でも一種どくどくの神秘の場所だった。気になってしかたなかった。

大正二年に「三田文学」に発表した日本文化論に、「かわや廁の窓」と題するものもある。便所、廁、雪隠、はばかり、と色々な名でその場所を呼ぶ。小説で登場人物をよくそこに行かせる。自身、おとなになってからも夜中の廁の窓越しの風にふるえ、雨や虫の音を聞き、小さな窓から月を見てもの思った。

家の一部でありながら、まわりの自然とつながる廁は荷風の気になる愛しい場所である。近代日本のうわべだけ綺麗に取り繕うニセモノ文化に舌戦をいどむにおいて、誰もが口をつぐんでタブー視する排泄の小天地は、彼が皮肉と諷刺の矢を放つ絶好のとりでもあった。

荷風に押されて文壇に華々しく出た谷崎潤一郎は、こうした荷風のことさらの排泄趣味に大きく啓発されている。かの大作『細雪』は美人姉妹を描くにつき、何かとヒロインたちの下痢について語るではないか。何より一世を風靡した谷崎の日本文化論『陰翳礼讃』には、純白でこうこうたる電気のががやく西洋のトイレットの単調に対し、家屋の外の自然の中につくられ、草や鳥の羽でふんわりと落下した糞尿を隠す日本の廁の優雅について熱心に語る箇所があつて目を引く。荷風の批評精神の継承に他ならない。

歌舞伎座の稽古

昭和二年、一九二七年八月に「中央公論」に発表された随筆である。原題は「梅雨日記」。なるほど六月二十三日より三十日まで、しだいに梅雨の季節の深まる日録の形をとる。のちに昭和八年刊行の単行本『荷風随筆』におさめられた。二か所をかかげる。

予は炎暑の日にも開け放ちたる窓に近く坐ぎすることを好まず、また煽風器の風に吹かるゝことを厭いとふが故ゆゑ、このカフェーに入りて楼に登るも階段に近くして窓に遠きところを扒えらびて坐を占むるなり。酔客の格闘かくとうするはこれ酒肆しやしにては殆ほとんど毎夜のことなり。されば階段に近きあたりに坐を占むれば、いざ喧嘩けんかとなりて、コツプビール壘うしろなど投げ付けらるゝも、後に硝子窓ガラスなければ硝子の破片の飛散おそる虞なく、かつは速すみに身をかはして逃にげることを得べし。諺ことわざにも家の闘たたかひをまたげば仇かたき七人ありとの誠まこと今の世にてもなほ心得おくべきことなるべし。

梅雨に入ったというのに珍しく空の青く晴れる日々。木村錦花きんかの脚色で、為永春水の小説「梅ごよみ」を歌舞伎座にて上演するにつき、ご意見番をたのまれた荷風。はなやかな舞台に出入りすることも嬉しいし、春水の名作のリバイバルも喜ばしい。ぜひ応援しなくては、と熱心に六月の後半